

# 上司小剣「ごりがん」論

森崎光子

## はじめに

上司小剣の「ごりがん」が発表されたのは大正九年六月、『文章世界』一五卷六号においてであった。小剣の名声が最も高かったのは大正三〜五年頃であり、この時期は既に全盛期を過ぎていたと言えよう。また、当時の文壇は、第一次世界大戦後の深刻な不況やロシア革命等のために社会運動が激化するというような社会の変化に応じて、文学の大衆化が始まり、プロレタリア文学もようやく勃興しようとしていた。このように大きく変貌しつつあった文壇のなかで、全盛期の「鱧の皮」の系譜につらなる「京阪地方の人物風土を題材にした」（谷崎精二「六月の文壇」『新潮』33巻1号、大9・7・1）小説があまり注目されなかったとしても無理はない。事実、同時代評でもほとんど取り上げられることはなかった。

しかし、「ごりがん」が小剣の代表作の一つであることに、疑問の余地はない。例えば、昭和二十七年に出た岩波文庫の『鱧の皮』は、解説を書いた宇野浩二の選択なのであろうか、「ごりがん」を冒頭に収録している。本稿は、この「ごりがん」と「ごりがん」の原型となる作品との比較を通して内容を分析し、再評価を試みるものである。

「ごりがん」の原型となる作品とは、「ごりがん」の発表から十年も前の明治四十三年十二月、同じ『文章世界』の五巻十六号に載せた「松茸」である。明治四十三年の小剣は、四十一年の文壇デビューから三年目、初期の代表作である「木像」を書いて、ようやく少しずつ評価されてきたところであった。だが、「松茸」は、読者の注目の集まる新年号の直前に発表されたこともあって、管見の限りでは一編の同時代評すらない、黙殺された作品である。

「松茸」と「ごりがん」には、どちらも舞台が寺であること、天南という名の人物が登場していること、父と息子が対立していること、長男が妻を嫌って寄せつけないこと、嫌われる妻の名前が絹であること、という多くの共通点がある。小剣は、「松茸」より半年ほど前に、「矢張どうしても自ら踏み、親しく観て、よくくく経験した事実依るより外仕方がないのは勿論」(「近時の感想」『文章世界』5巻5号、明43・4・15)であると述べている。自然主義系の作家らしく、自己の体験や見聞をもとに小説を書くのであり、とすれば、この二作品の共通部分は(名前は虚構であろうが)事実と考えられる。ただ、小剣の育った環境とは全く異なっていることは明らかで、体験ではなく身近な見聞を踏まえているのであろう。

身近な出来事を親しく観察すると言っても、小剣は事実を完全に忠実に描くことはない。それは、「松茸」と「ごりがん」の相違を見ればよく分かる。

「松茸」の主人公は、光徳寺の二男天南である。彼は、家族から風来山人というあだ名を付けられている。風来山人といえば平賀源内が連想されるから、源内のような奇人変人という意味であろうか。天南が泥棒から松茸を守るために山に小屋を作りだした時、兄は「家の風来山人がまたあんなことを始めた。風来山人の山番ぢやア、松茸泥棒に取りに来て呉れと云ふ看板を出しとくやうなものだらう」と言う。「またあんなこと」という言葉から、兄の価値基準か

らすれば評価しがたいことを度々天南がしかしたということが分かる。さらに、天南の山番では泥棒に来てくれというようなものだというせりふにも、天南のすることがうまくいくはずはないという気持ちがかがえる。このような天南に対する低い評価は兄だけのものではない。父の住職も妹も同様に天南を軽んじている。父は天南を「あんなもの」と言い、妹は父や兄の天南に対する態度を模倣し、天南がいくら呼んでも返事すらしない。天南を気づかうのは、無力な母だけである。

では、なぜ天南は、母を除く家族からこれほどまでに貶められるのか。その背景として考えられるのは、彼が二男であるという点である。長男である兄は跡取りであり、「この春副住職になつて」寺の後継者としての地歩を固めている。それに対し、二男の天南は部屋住みの厄介者でしかない。従つて、風来山人というあだ名には、「定まった居所や仕事もなくぶらぶらしている人」（『大辞林』、三省堂、平元）という風来坊の意味もこめられているのかもしれない。しかし、それだけが理由とは考えられない。

僧侶は村のなかでは、一般の村人である農民とは違う、特別な人々である。「父は相も変らず尺八と盆栽とに耽り、兄は小学校に忙しかつた」。小学校の代用教員をしている兄は、村の知識人という側面をあらわし、尺八と盆栽に凝る父は、風流人という側面をあらわしている。しかし、二男に生まれた天南は、寺の子であるのは確かであるとしても、父や兄のような生活を送れる保証はない。そのため、天南は父や兄にとっては当然の価値観を身につけなかつた。だから、天南の行動は父や兄には理解不能なのである。天南が家族から奇人変人扱いされるのはそれ故であろう。

価値観の異なるこの親子は、第三章で衝突する。自分の命令を無視し続ける妹に怒つた天南は、妹に暴力を振るう。そこへ父が出てきて「怖い顔で兄妹の中に分け入り」、睨み合いになる。『光を打つなら乃公を打て……』と父が言うのと、天南は「フイと身を外すと」「父の居間に飛び込んで、床の間の石榴の盆栽を足蹴に顛覆し」、山の小屋に向かった。

二年前の「神主」では、息子の父への反抗が語られてはいたものの、息子は不在と設定され、親子の衝突の様子が描写されることはなかった。しかし、「松茸」では、親子の衝突が描かれる。とはいえ、天南は父と睨み合いまではするが、最終的な決裂には至らない。天南が妹を打つのは、妹が兄である自分の命令をきかないからである。つまり、天南にとっては妹が兄の命令に従うのは当然なのであり、家族のなかの上下関係は彼のなかで内在化されている。だから、父に、妹の代わりに自分を打てと言われると、天南は引き下がらざるをえない。下位の者が上位の者に逆らってはならないからである。無論、父もそれを見越してこのような発言をしたのであろう。父が妹の味方をした時、妹に対する怒りは父への怒りに転嫁されたが、それを父に直接向けられない代償に、天南は父が大事にしている盆栽を足蹴にするのである。この行為はまた、父の価値観に対する拒絶をも意味していると思われる。

この事件で、天南は自分が家族のなかで異分子であり、居場所がないことを、いまさらのように自覚させられたのであろう。山の小屋に寝泊まりするようになった天南は、そこに様々の物を持ち込む。つまり、自分の居場所を作ろうとするのである。さらに、天南はこの「家」に伴侶と共に暮らすことを夢見る。

実は、家族のなかに天南の他に、もう一人の異分子「婚礼のその夜から兄が嫌つて側へ寄らない名ばかりの嫂」がいた。嫂を山に案内した天南は、「義姉さん、此処が僕の家です。僕はこんな家でもいゝから、義姉さんと二人で安楽に暮して居たいと思ひます。」と熱心に言い、「眼を据ゑて」嫂を見つめた。家族から疎んじられている天南が、夫から疎んじられている嫂に親近感を抱いたと推測されるが、嫂は「笑ひを忍ぶ状で」「さうですかねえ」と答える。真剣な天南に対し、嫂は軽く受け流しており、天南の思いが実りそうもないことを示唆して、作品は終わる。

赤坂憲雄は『異人論序説』（ちくま学芸文庫、平4）で、△異人▽の一種として、「秩序の周縁部に疎外された」マージナル・マンを挙げる。「古典的な定義によるマージナル・マンは、二つ以上の異質な社会文化のマージン（境界・限界）にたたずむ人間を意味するが、広義には、集団の成員としての資格や機能を十分に果たしていない人間」例えば、

精神病者、身体障害者、非行少年、犯罪者、変人、売春婦等々をさすと言う。天南は、この広義のマージナル・マンに当たると考えられる。既述のように、風流や知の世界に生きるのが当然という寺の常識にもかかわらず、天南はそれを内在化することはなかった。そのため、天南は家族から風来山人と呼ばれ、異分子として疎外される。

天南は、持ち山に生える松茸を泥棒から守って収穫し、町から来る商人と交渉をして出来るだけ高く売ろうとするのだが、父は天南が商人と応対する「高声を聞くのが厭やで耐まらない」と言つて、聞こえない所へ逃げてゆく。価格交渉という卑俗な内容に、風流を業しむ住職は拒絶反応を示したのである。しかし、いくら寺でも金と無縁でいられるはずはない。実は、天南はこの金を母に渡している。嫂の処遇も母が一任されており、おそらく父や兄は実生活上の雑事を卑俗なこととして軽蔑し、母任せにして、自分たちは高尚な風流と知の世界に立てこもっているのである。だから、母を助けるための天南の行為は、彼らに評価されず、貶められる。もともと、天南は父や兄と対比すれば実生活の側にいると言えるが、嫂と山の小屋で暮らしたいと夢見るなど、非現実的な面もある。なぜなら、寺の「秩序の周縁部に疎外された」ということは、天南がやはり寺の世界の中に在ることを意味するからである。従つて、自分の居場所を作ろうにも、天南は周縁に位置する山の小屋にしか作れないし、伴侶を求めるにも、寺の世界の中で自分と同類の嫂に思いを寄せることしか出来ない。天南が変人と見做されるのは、寺の価値観を内在化しなかったとはいへ、寺の世界の中でしか生きる場所がないからであろう。

## 二

「松茸」は風来山人というあだ名を用いて、主人公の置かれている状況と性格を示していたが、「ごりがん」では「松茸」以上に効果的にあだ名を用いている。「ごりがん」という題名はそのあだ名であり、作中で「駄々ツ児六分に、変人二分に、高慢二分と、それだけをよく調合して出来上つたかみがたの方言」と説明されるように、主人公の性格を

表す上方方言である。実は、「松茸」には上方らしさは全くなかったが、反対に「ごりがん」は上方らしさが作品の特徴となつてゐる。

「松茸」の主人公は天南であつたが、「ごりがん」の主人公は天南ではなく、父の住職である。作品は、この、「ごりがん」の老僧隆法の死亡通知を、語り手の「私」が受け取つた現在の時点から、隆法に関する回想のかたちですすんでいく。老僧は息子の天南と反りが合わない。名前と父子の關係は同じであるが、「ごりがん」の天南は「松茸」の天南とは違う面も多い。既述のように、厄介者の二男であつた「松茸」の天南に対し、「ごりがん」の天南はあととり息子である。従つて、彼は疎外されるマージナル・マンになりうる境涯にはない。それなのに、天南が父との折り合いが悪いのは、次のような、極めて個別的な理由による。

天南はよく蛇を擲つて蛙を助けた。幼い時竹片を持つて遊んでみると、蛙がぎやア／＼鳴くので、其の悲しきうな声をたよりに竹片で雑草の中を叩き廻はると、蛇に吞まれかけた蛙が、跛足引き／＼危いところを逃げて行つた。其の脚の先きは、もう蛇の毒で少し溶けかゝつてあるやうであつた。「晩にはあの蛙が大きなお饅頭を持つて礼に来るぞ。」と父が言つたので、天南は其の夜どんなに饅頭を待つたか知れなかつたが、父の言葉は真ツ赤の嘘であつた。それ以来天南は父を信用しなくなつた。／＼本堂のお花を取りかへるやうに、父から言ひ付かつたことが度々あつたけれど、天南は一度もそれをしたことがなかつた。

幼い日に抱いた父への不信任・反発は父の命ずる寺の仕事への嫌悪となり、天南は「寺の用となれば、目の敵のやうにして打ツちやらかして置く」やうになつたというわけである。しかし、こういう幼児体験がここまでエスカレートするのは尋常ではない。おそらく、そこには天南自身の性格が大きく関わつてゐる。「天南はごりがんの上に大変人で、また怠惰者であつた」。つまり、天南は父似で、しかも父に輪をかけたごりがんであつたのである。

この、天南の父との不和の原因や性格の説明は、一章で全知の語り手によつて行われている。天南と交際のない語

り手の「私」には、知りえぬ内容だからである。二章以下、「私」が老僧との交際を通して語るのは、まずは老僧のこりがんぶりであり、読者はこのこりがんなる性格のおもしろさを楽しみつつ読み進めていくことになる。「松茸」では、天南が風来山人と呼ばれているところから、彼が家族から変人として遇されていることは分かるものの、それは真の変人というよりも彼の置かれた境遇によつてもたらされたように読める。つまり、読者から見て天南は変人であるとは感じられない。しかし、「こりがん」の老僧は違う。

二章では、二、三年前の最初で最後の上京の折の老僧が描かれている。老僧はかつて「私」の郷里で神主をしていた「私」の亡父と親しく往来していた人物であるが、突然「私」の家を訪ねてきたのである。東京見物と称しながらどこにも行かない老僧を「私」が案内しようとしても、「あんた行きたけりや、一人で行くがよい。わしは其の間座禅組んで待つてる。」という、こりがんぶりを發揮する。また、老僧は「天南ももう三十ぢやから、妻帯さしてやららん。」と言ひ、帰りに結納を京都で渡すという。しかし、この縁組は「本人同志はまだ、ちよツとも知らん」という縁組であつた。

三章から四章では、去年、「私」が大阪に旅行した時、宿に訪ねてきた老僧が描かれる。そのうち、三章は二章に続いて老僧のこりがんぶりが描写されている。例えば、「私」への電話を取り次いだ女中は「こりがんからや言やはりました。」と笑い転げる。翌朝、宿に來た老僧は女中に、「いや、煙草盆はあるにはあつた。けどもそれはわしに出した煙草盆やない」とか、『客に茶を出さんといふことがあるか』と、ずけずけと文句を言う。だが、この三章には二章にはなかつた老僧の一面が描かれている。それは、文明の利器を用いる老僧の姿である。老僧が庫裏に電灯を点けたり、電話をかけたたり、軽便点火器（ライターのこと）を使つたりするのを知つて、「私」は「あの老僧と電話といふものとの対照が既に妙である」、「流石のこりがんも征服されたか」と考える。老僧の性格からして、従来の習慣を頑固に守り続けるほうがこりがんらしいのは明らかであろう。老僧は、『便利ぢやからと言つて、人が勧めるんで、やつてはみ

るが、あんまり便利でもない」と、使つてはいても文明の利器に心服しているわけではなさそうである。にもかかわらず、使いだしたのはなぜであろうか。それは、おそらく四章で老僧が「私」に語る出来事と無関係ではない。

四章で語られるのは、二章で老僧がお膳立てした天南の結婚の顛末である。要するに、「天南は自分へ何んの話もなく、親が勝手に決めた縁談に、別段不服のやうでもなかつたが、婚礼の当日、花嫁が到着のどさくさ紛れに、何処かへ姿を隠して了つた」のであつた。

「年頃になつたから、家内を持たせる。年頃になつたから、片付けてやる。……それでよいのぢや。……生れようと思つて、生れるものはないし、死なうと思つて死ぬものもまア滅多にないのと同なしことぢや。婚礼だけが本人の承知不承知を喧しく言ふにも当たろまい。親の決めたものと、黙つて一所になつてたらえゝのぢや、他力本願でなア。」

老僧が結納前に「私」の家で語つたこの言葉は、自宗の他力本願の教えにことよせた、老僧のごりがんぶりを示す言葉として描かれている。もつとも、老僧に限らずこの時代、老僧程度の年齢の人間にとつては、年頃の子供に親や周囲が配偶者をあてがつてやるのは当たり前のことであつた。だが、それは、この言葉を聞いた「私」の妻が「呆れてゐる」と描かれているように、「私」のような都市生活者や天南のような若い年代にとつては、もはや受け入れがたいものとなつてゐる。老僧が「私」に、「××さん、あんなもんかなア、今の若いもんといふもんは。……親の決めた縁談が不承知ぢやなんて、滅相な。」と言つた言葉は、息子に拒絶された老僧のショックと、その事実の受け入れがたさを表している。しかも、老僧のショックは、それが息子への愛情に発していたからよけい大きかつた。

老僧は、天南が「少女歌劇とやらを觀に行くと言つて時々宝塚の方へ出かける」のを、「女欲しさの物好きと睨んだから、一日も早く家内を持たせるに限ると思つて、老僧の眼にも十人並を少し優れたあの娘なら、無断で宛行つても喜ぶ」だろうと考えたのであつた。しかし、天南の家出によつて、この一人合点の愛情の押しつけを拒否された老僧



は、以後、息子に関してごりがんを發揮することができなくなつてしまつたのである。例えば、家出後、老僧は花嫁の親に「平生のごりがんがすつかり肩を窄めつゝ」善後策を相談し、老僧とは「反対にごりがんをきめ出した」先方の親の提案で、花嫁を老僧の養女にした。やがて、天南が宝塚の山の上の庵室に住む旅絵師のところにいることを知つた老僧は、庵室を訪ねていく。絵師に会つた老僧は、絵師の横柄さに「何糞ツと思つたが、腹を立てた為めに天南を隠されると困ると考へたから」我慢して、息子に会わせてくれと「殆んど生れて初めての懇懃さで」頼み、「ほんたうならごりがんをきめ込みたいところを、老僧はなほも虫を殺して、俯向いたまゝであつた」。

そして、おそらくこの事件で深刻な打撃を受けた老僧は、従来の考え方を守り続けられない現実を思い知らされたのである。大阪の「私」の宿を訪ねてきた老僧が、不満を言いながらも、文明の利器を用いるようになってゐるのは、この老僧の変化によるものであつたと思われる。

その数日後が五章である。天南に会つてみる約束を老僧とした「私」は老僧の寺を訪問した。たまたま山から寺に戻つてきた天南は「私」に、『下界は厭やだす。けどなア、飯だけは下界の方が可味いので、時々喰ひに来たりまんね。飯さへなかつたら下界に用はない。』と語る。それを聞いた老僧は、「何時の間にか鼻の先きに汗を浮べて、ヂツと拳を握り詰めてゐた」。天南が一蹴する「下界」には、無論老僧も含まれている。先年の家出という行為に対しては、天南が女嫌いであつたからという解釈も可能であつたが、この言葉は、天南が父親を含む自分を取り巻く全てを否定していることを示している。この決定的な言葉の前に、老僧は拳を握りしめ、耐えるしかない。これまでごりがんぶりを發揮してきた老僧であるだけに、その姿はいつそう哀れと言えよう。

### 三

もつともこの作品は、老僧に同情的であるのは確かだが、父を拒絶する天南に批判的であるとは言い切れない。そ

これは、語り手の「私」の描かれ方からうかがえる。「私」は、老僧が天南に無断で嫁をあてがったのをたしなめはするものの、他方、五章で寺に行く前、宿の隣の家の物干し台に「幅一寸に長さ五寸ほどの薄い板」が乾かしてあるのを、何か分からない「私」が女中に尋ねると、「くし（櫛）でひよう」と言われたが、「私」は串と解して首をひねるという描写がある。ストーリー展開の上で特に必要とも思われぬこの描写が、「私」が天南に会う直前に置かれているのは、「私」が天南を正しく理解できないことを暗示していると思われる。老僧は天南が結婚を嫌ったことから天南を「不具者ぢやないか」と思い、「私」に相談したため、天南を観察した「私」は、「女嫌ひでは通らなきうなのに、或は身体が不具でゞもあることかと、私は一種の痛ましい感じに打たれながら、天南の様子を見詰めてゐた」。しかし、天南の「下界は厭やだす」という言葉は、精神的あるいは肉体的不具という解釈では説明しきれないのではないか。

宝塚の山の上の庵室に住み着いた旅絵師と懇意になった天南は、少女歌劇を口実に絵師の許を訪れていた。この口実を老僧は女欲しさと勘違いして、嫁をあてがったのである。押しつけられた婚礼当日、天南は家出して絵師の許に身をよせた。居所を知って訪ねた老僧が見たのは、一寸見には分からぬほど「変り果てた」天南の姿であった。絵師の姿を「頭髮が肩まで伸びて垂れ下がった垢だらけの男が、汚れくさった布子の上へ、犬の皮か何かで拵えた胴着のやうなものを羽織つて立ち現はれた」と描写しているところから、天南も似たような姿をしていたのであろう、老僧は「まるで狂人ぢや」と思い、「我が子ながらも気味わるく、恐ろしく」感じた。

前掲『異人論序説』に従えば、旅絵師も△異人▽であり、「一時的に（定住民と）交渉を持つ漂泊民」にあたる。天南がこの絵師と親しくなったということは、そういう生き方への憧れがあったからではないだろうか。漂泊民への憧れは、裏返せば定住民の生活への嫌悪を意味する。共同体の中に定住する人々は、共同体の規範に従うことよって生活の保障を得る。共同体と言つても天南の場合は、自分の生まれ育った家である寺であり、規範とは具体的には父の命令である。この命令に従うことが、天南にはできなかつたのである。一章で全知の語り手は、天南が幼時の体験

から父を信用しなくなり、父に命じられた寺の用事を「目の敵のやうにして打ツちやらかして」おいたと記す。そして、天南は結婚の押しつけを拒否して、ついに「下界」すなわち世俗との縁を断ち切り、世俗の規範から自由になったのである。肉親の絆も身なりも、もはや彼には意味を持たない。自らすすんで△異人▽となった天南を、世俗の住人である老僧が「氣味わるく、恐ろしく」感じたのは当然であろう。

「松茸」の天南は父と衝突するものの、引き下がったが、「ごりがん」の天南は父に従わず、決定的な拒絶を行った。この違いは、「松茸」の天南が共同体の周縁部に疎外されたマージナル・マンとしての△異人▽であったのに対し、「ごりがん」の天南は自ら共同体から離脱して△異人▽となったことによる。また、これと関連して、「ごりがん」の天南には共同体の外の世界に導いてくれる旅絵師がいたが、「松茸」の天南にはそういう存在はいなかった。さらに言えば、二男と長男という、家における立場の相違も、二人の父に対する態度を決定づける要因となっている。

かくして、疎外される、受動的な△異人▽であった天南は、自分の意思で世俗の矩を越えた、能動的な△異人▽となった。この天南の変貌は、「松茸」の書かれた明治四十三年と、「ごりがん」の書かれた大正九年当時の社会情勢の相違と、おそらく無関係ではない。

明治四十一年の赤旗事件以来、政府の思想弾圧は苛烈なものとなり、社会主義者はもちろん自然主義文学までも対象として、次第にエスカレートしていった。四十三年五月には、大逆事件による社会主義者の検挙が始まり、小剣がかねてから敬愛していた幸徳秋水も六月に逮捕され、「松茸」執筆当時はその公判中であった。小剣は幸徳秋水の影響で三十九年頃からアナキズムに傾倒しており、自然主義文学に関心を抱くようになったのも、一つには自然主義文学が当初旧権威に対して反抗するという傾向が強かったからであった。しかし、政府の思想弾圧は自然主義から反抗という要素を失わせ、社会主義者も一網打尽になってしまった。アナキズムの掲げる、自由を求め抑圧者に反抗す

ることなど、不可能な時代になっていたのである。もちろん、「松茸」の天南に、幸徳秋水ら社会主義者や自然主義文学を直截に重ね合わせるのには明らかに短絡であるが、こういう時代の空気を反映した作品とすることはできるのではないか。

一方、大正九年は、第一次世界対戦後の不況と物価高騰による生活の困窮、さらにはロシア革命の成功による思想的影響の結果、労働運動や社会主義運動が急速に拡大し、盛り上がった年である。この影響を受けて文壇も、文学の大衆化、プロレタリア文学の勃興など大きく変化しつつあった。小剣も大正六年頃から社会性の強い作品を書いてきたが、翌十年には『東京』の執筆を開始する、その前年のことである。従って、自由を求め抑圧者に反抗することが可能な時代になり、また実際にそういう人々が現れていた。「ごりがん」の天南も、そういう若者たちの一人として設定されているものと思われる。

とはいえ、天南の描き方にこういう社会情勢の変化を反映させてはいるものの、「ごりがん」は、あくまで老僧が主人公である。上方らしい、ごりがんという性格の面白さをユーモラスに描きながら、その老僧が息子の反抗に胸を破られてごりがんらしさを失い、失意のうちに死んでゆく姿に、我が子に拒絶された親の悲哀が示される。この小説は、父親の側から描いたことで、読者の情に訴えかける、小剣の小説作りのうまさやうかがわせる作品になっている。しかし、逆にそのことが、大正九年の時点の文壇にあつては、古さを感じさせることになったのであろう。生まれる時期に恵まれなかった、小剣の代表作の一つである。